

# 春色の回走

レルト

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したもので  
す。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を  
超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

私立時雨学園、その高等科に通う、ごく普通の男子生徒 三枝一成（さえぐさ いつ  
せい）と、個性豊かな友人、知人達。後に彼らは悲惨な運命をたどることになる。一成  
はやがて、その運命に気づき、それを回避するために様々な策を講じることになる。

D D D  
a a a  
y y y  
3 2 1

闇夜 平和な時間  
色が消える

目

次

14 7 1



# D a y 1 平和な時間

## 一

三枝一成はガバリと起き上がった。寝ぼけ眼で部屋を見回し、少し落胆する。『目覚めたら、そこは異世界だった』などという展開を期待していたのだが。

それにしても、珍しく早い目覚めだ。一成は普段、目覚ましが鳴るまで爆睡なのだ。おかしな夢を見たせいだろうか。原因はわからないが、それよりも、一成にとつては、6時40分という、とても中途半端な時間に起きてしまったことの方がよっぽど重要なことだつた。

「せっかくの平和な一日の始まりなんだけどなあ」

もう少し寝たいが、この時間に二度寝しては遅刻してしまう。のそのそと起き出して、日課のトレーニングを終えて、制服に着替える。そして、遅刻ギリギリまで惰眠を貪つている弟を居間まで引っ張つていき、まとわりついてくる姉をかわし、顔を洗つて、朝食を作る。早起きをした朝は気持ちがいい。

「遠くで目覚ましが鳴っているけど、気にしない」

「いや、気にしようよ?」

即座に突っ込みを入れてくるうるさい弟。

「元気いいねー」

頷きながら両親と静観を決め込んでいた姉たちとともに、三枝一成の、いつも通りの、平和な一日は、始まりを告げる。

## 二

制服に着替え外に出ると、そこにはよく知った顔が2つ、篠崎小春（しのざきこはる）と春宮つくし（はるみやー）だ。

「ところで篠崎、君の名前つてさ」

開口一番、一成は前々から気になっていたことを尋ねてみた。

「おおう、いきなりだねえ」

篠崎小春は大げさにのけぞり、驚きを表現した。わざとらしいリアクションだが、これが彼にとつての普通である。

「ほんと、女の子っぽいよね。あ、おはよう」

「小春って見た目からしてどつちつかずだからね。それと一成、挨拶のタイミングがかしい」

見ての通り、一成はマイペースな男である。

そして、なぜ今更一成が篠崎の名前について質問したのかは不明だが、篠崎小春は

女子のような名前と、これまた女子のような顔とは裏腹に、性別は男という性別不詳な一成の友人である。

さらに、一成に対してさりげなくツッコミを入れているのが春宮つくし、彼らの通う時雨学園高校にて新聞部が発行している情報誌、『サラマンダ』の常連コーナー『美少女ランキング』(根拠不明)で三年生の先輩と首位を争っている、正真正銘の美少女だ。この3人は、ひょんなことから知り合い、ひょんなことからいがみ合い、ひょんなことから親友と呼べる間柄になつたのである。

「おはよう篠崎。君つてここから家つて遠いし回り道だよね。なんでいるの？」

「いつも来てるだろう。どうした?今日はやけに俺への意見質問が多いな」

「きつとまた、『なんでここは異世界じやないんだ』って拗ねてるんでしょう?いつものことじやん」

そんなことを喋りながらバス停へと向かう。

### 三

時雨学園は、東京ドーム40個分ほどの敷地に建つてゐる。小学、中学、高等で棟が分かれしており、幼稚園は敷地内の別の建物にある。エスカレータ式に進学し、ここに入学した者は、だいたい高等部を卒業してゆくのである。

バスを降りて敷地内へ。春の心地よい風が吹き抜ける中を、三人で肩を並べて学校

への道を歩くのだが。

「はあ、とつくしがため息をついた。

「どうしたよ、ため息なんてついて」

「なんで高校の校舎って、こんなに遠いのよ」

「そうだねえ。僕も入学した時はめげそうになつた」

「俺はあんま感じないな。徐々に増えていけばどうということはない」

小春は幼稚園から在籍しているので、三人の中では一番の古株だ。中学から入学してきた一成は、つくしとは高校で初めて会つた訳ではないが、きちんと話したのは高等科につくしが入学してきてからだ。

「おつと、案内図によるとここの3kmを歩ききつたぞ」

高校校舎までの道のりが、直線距離よりもかなり長くなっているのは、間に建つている小学校舎、中学校舎、そしてなぜか事務の棟があり、曲がりくねつているがゆえだ。予鈴がなつていて、もうすぐ授業が始まる。

#### 四

今日は珍しく、小春とつくしは予定があり、一緒に下校できないうらしい。折角なので街に出てみることにした。

一成達の住む町は小さな田舎町だが、すぐ隣には田園風景とは縁遠い巨大都市が広

がつて いる。

「さてと、今日はどうしようか」

行きあたりばつたりが一成のモットーだが、今回ばかりは失敗したと言えよう。

「君は：三枝くんじゃないか」

（まずい、捕まつた！）

目の前に現れたのはスーツを着た長身の男だ。

「今日は君に時間についての楽しい話を聞かせてあげよう」

「いえ、結構です」

逃げようとすると、がつちりと腕を掴まれてしまう。

「いいかい、時間とは、この世の全てのものが持つて いる変化の歴史なんだ」

もう何度も聞いて いる話だ。前置きのあとは、淡々と楽しいお話を 続くのだ。

「物だつて、人だつて、その空間でさえも時間を積み重ねて いる。だから、俗に言うタイ  
ムスリップはできないんだ。でも、それがもしそれ自身だつたら、出来るかもしねりない」

あまりにも馬鹿げた話の展開に、一成は苦笑した。

「もしそんなことができるとして、君は時を遡るんだろうか」

「愚問です。僕はそんなことに興味がない。それに、できたとしても、過去に戻つてやりたいことなんて、ないです」

言つて一成は、いそいそと帰路につくのだった。

もう何度、あの男から同じ話を聞いたかわからない。あのスーツの男は、過去幾度となく一成に接触してきた。そして、会う度に同じ話を聞かせてくるのだった。そう、何度も何度も。

## 五

「本当、なんなんだろあの人は」

帰宅して、自室にて、一成は布団に体を投げ出して呟いた。

「そう言えば、あの人はいつから僕にあんな事を話すようになつたんだつけか」

確かに、初めの方はそのような話はされていなかつた気がする、と思う。そもそも、彼がはじめて一成の前に現れたのはいつなのか、それすらもわからない。だが、このわずかな違和感も、すぐに消え去つた。一成は既に、夕飯のことしか頭にない。寝返りを打つ。微かなクツシヨン性のある掛け布団が心地よい。大して何があつた訳でもないが、横になつていまうと睡魔が襲つてくるものである。夕飯時までは、まだ時間がある。少し眠つてしまおう、と一成は静かに目を閉じた。

# Day2 色が消える

一

曇っている。辺りは暗いが、一応昼間なのだろう、雲の中からは、うつすらと白い光が差し込んでいる。

そこに人はいなかった。道ばたには草が生えておらず、建物も綺麗なので、無人の町、という訳では無いようだ。目の前にたたずむ民家の庭にはプランターが置いてあり、大事に育てられているであろう花が植わっている。こんなにも生活感のある町並みなのに、この住宅街はなんだか、殺風景に感じられた。

——知っている。

なんとなく、そう感じた。ただそれだけの事なのに、なぜ？なぜ、これほどの虚無感に襲われるのだろう。知らないはずなのに、知っている。もともと持っていないのに、何かをなくした気がする。この、胸にぽつかりと空いた穴を塞ぐには、どうしたらいい？

なにかの音がする。雨だ。雨が降ってきた。雨は何もかもを——世界にあつたはずの色も洗い流してゆく。

視界がにじみ、音も遠くなつてゆく。意識が薄れる。もう何も聞こえない。ただ、聞こえなくなる直前、降りしきる雨の中で、誰かの声を聞いた気がした。

二

「夢、か」

つぶやき、三枝一成はベッドから起き上がつた。心なしか、汗と、涙がにじんでいる。

「ん、涙。なんで僕は泣いて…」

考えて、先ほどの夢を思い出す。

『―――知つていい。』

あれはなんだつたのだろう。

考へても仕方ないと、支度に取りかかることにした。今日も今日とて、異世界には飛ばされてはいられない。

「まあ、平和なことはいい事だよね。もし本当に飛ばされたら大変だし」

日課の筋トレをこなし、制服に着替え、弟を起こし、朝食の準備を手伝う。手馴れた朝のルーティンワークだ。そして、特に大きな問題もなく家を出た。

一成の家があるのは、この田舎町の中では比較的都会じみた住宅街の一角だ。住宅街を抜け、少し進んで大きな道に出ると、いつもの待ち合わせ場所なのだが、2人の姿はない。一成は、15分だけ待つことにして、そばにある電柱に背中をあずけ、腕組み

をした。

## 二

少し遡り、時は真夜中。とある地方都市の隣に位置する、とある田舎町の住宅街。コードネーム：iceは、電柱に寄りかかった状態で腕を組み、しきりに足でリズムを刻んでいた。

「少し早く来すぎた。そろそろ、だね」

程なく、『それ』は現れた。そして、1分経たないうちに『それ』は消えた。

「まだ未完成なのか、それとも様子見か」

iceは、ひとつ、短く息をつき、きた道を戻つてゆくのだった。

## 三

三枝一成は不思議に感じていた。なぜ、彼らは来ないのだろうか。そんな一成の頭をよぎつたのは、二人が何らかの事件事故に巻き込まれているのではないかという懸念だった。

「彼らが遅れてくるなんてありえないし、やつぱり先に行つたのかな」

不吉な懸念は封印し、とりあえず学校に行くことにして、その道すがらの出来事であつた。一成の目に、一人の少女の姿が留まつた。凜とした姿で、つかつかと歩いているようで、その瞳はきよろきよろと周囲を見回しており、どこか不安の色が見える。

「君、迷子」

一成が軽く訊ねる。

「気安く話しかけないでください」

「だつてさ、明らかにきよろきよろしてたじやない」

「あなたには関係のないことです」

少女が歩調を速める。これは少し面倒だ、と一成は心の中で肩をすくめた。

「その制服、時雨のだよね。時雨高校の人」

一成も、合わせて歩調を速めた。

少女は立ち止まり、語調を強めた。

「まとわりつかないで、鬱陶しいです。あと、道案内もいりませんっ」

先ほどよりもさらに速い歩調で、つかつかと去つてゆく。

「あ、そつちは逆方向：はあ」

声は届かなかつたと見えて、つかつかと視界から消えてゆく。

「（見事なモデルウォークだつたな）」

などと考えながら、一成も学校へ急ぐ。

学校が近づいてきた頃、一成は少し前からしていた背後の足音を不審に思いはじめた。歩きながら、ちらりと後ろを確認すると、そこには先ほどの少女が…！少女は息を殺し、足音を忍ばせ、先ほどの堂々とした歩き方とは打って変わっておどおどした様子でついてきていた。一成は振り返り、ささつと物陰に隠れた少女に、「道案内が必要なら言つてくれればよかつたのに。ほら、もうすぐ学校だよ」

と、少し声を高くして教えた。すると、少女は恐る恐るといった様子で物陰から出てきた。

「気づいているならそのまま知らない振りをしていいれば良かつたじゃないですか」

もつともな話である。だが、一成にはひとつ目的があつた。そのために、わざわざ少女と追加のコンタクトをとつたのである。

「ところで、気になつていたのだけど、君、見ない顔だけど、誰。なんで迷子になつていたの」

少女は訝しげに一成を見つめた後、口を開いた。

「柳田美桜。今日から編入することになつて的一年生です」

一成はとても意外に思つた。なぜなら、和風な顔立ちで、綺麗な黒髪、そして頭髪に負けない澄んだ黒色の瞳のこの少女、柳田美桜（やなぎだみお）は、堂々とした様子ではあるが、顔立ちは幼く、身長は一成の頬辺りなため、てつきり一年生かと思つて

いたからだ。

「へえ、二年なのか、なら僕と同学年だね」

「そうですか、意外でした。見た目の印象だけで、勝手に三年生かと思つていました」

思つたことは素直に口に出すタイプかもしれない、と一成は苦笑した。しかし、思春期の男子にとって、実際より大人に見られるのは決して悪い気はしない。そんなことを考えながら、成り行きで並んで登校した。

「私、職員室に寄らないといけないので」

転校の最終手続きがあるらしい美桜と別れ、一成は一人で教室へ向かつた。

## 五

——それは、一瞬の出来事であつた。

——いつもの通学路を歩く女生徒の足下は、その瞬間音もなく消え去つた。

——そして、奈落へ落ちてゆく女生徒。

——しかし次の瞬間、彼女を飲み込んだ穴は、何事もなかつたかのように姿を消して いた。

一部始終を見ていたもう一人の女生徒は、大変に驚き、次の瞬間その顔は絶望と恐怖に塗りつぶされていた。それもそのはずである。隣を歩いていた友人が、黒いもやに包まれたと感じたかと思えば、次に瞬いたら、女生徒の友人は影も形もなくなっていた

のだから。

——かくして、三枝一成の周囲で起ころ、奇妙な事件が始まったのであつた。

## 六

結局、友人二人は登校しておらず、一成は大変に心配していたが、担任からの「病欠」という情報を得て、胸をなでおろしたのであつた。

そして、いつも通りの授業が終わり、下校途中のことである。今日は普段と違い、徒步で帰宅していた。住宅街の一角に差し掛かつたところで、一成はふと右を向いた。この景色は、以前からずつと知つていたように感じたのだ。しかし、と一成は首を振った。自分が何か、超常現象の類に関わっていたらいいと思うことはあるが、さすがに今回のこととは強引すぎる気がした。自分の住む町だ。いつ見えていてもおかしいことはない。

自分の馬鹿げた妄想を嘲笑し、一成は我が家へと向かつて歩き出した。  
「そうだ、あの漫画、新刊が出たんだつた。よし買つていこう」

今日も彼の住む町は、概ね平和である。

# Day 3 閨夜

—

白い、ただただ白い。白い白い白い。とても冷たい色。  
黒い。ただただ黒い。黒い黒い黒い。とても暖かい色。

ずっとずっと、この相反する二つの光に包まれながら、今まで通り、幸せに、幸せに……幸せに……。

今日の夢は、いつもとは少し毛色が違っていたと、一成は感じた。枕元に置いてあるティッシュ箱からティッシュをとり、未だ涙を吐き出し続いている涙腺をきつく押さえた。強く閉ざした瞼の裏にふと、ある少年の顔が浮かんだ。しかし、それは一瞬のことであつた上、そのような少年に見覚えはなかつたので、目の錯覚ということにして家を出た。

今日こそは、一成が今はまつてゐる漫画の最新刊を買うことを、一成は心に誓つていた。結局昨日は、朝出会つた少女、柳田美桜に捕まつてしまつた。道に迷つていたようで、意外とあつさり道案内を頼まれ、一成は、また迷われてはかなわないと、実際に歩いて町の地理を教えこんだのであつた。

「今日は誰とも会わないといいけれど」

「呟いた一成に、悪夢の宣告たる声がかけられる。

「あ、すみませーん。本屋さんがどこか知りませんか。」

よく磨いた細い鉄の棒を打ち合わせたような、よく通る、まつすぐな少女の声だ。

しかしこれは、三枝一成を激動の一日へと放り込む、ゴングの音なのであつた。

「……」

「あの、知つて、ますよね」

少女は尋ねてくるが、一成にはその声が確かな自信を宿しているように思えた。  
「なんでそう思うの」

「だつてさつき、図書券を握りしめてサムズアップしてたじやないですか」

この少女は鋭い。実際には、一成は、財布を覗き、図書券が残っていたため軽くガツツポーズをしただけなのだ。このまま鬭つても、何か重大な証拠を突きつけられて論破されるに違いない。一成は折れた。

「わかつた、わかつたよ。案内すればいいんでしよう」

二

近所の書店にて、一成は目当ての漫画を買い終えたのだが、少女におすすめの本を訊かれ、当惑していた。一成は漫画は読めども、そのほかは一切読まないのだ。

「あ、漫画でいいですよ。あなたの好みが気になつただけなので」

「そう」

一成は内心溜息をつき、胸をなでおろした。

「なら、この辺りとかどう」

一成は漫画ならなんでも読む。特にこれと言つて趣味趣向がある訳ではないので、目の前の少女に合いそうな本をチョイスしてみたのだが、

「……」

少女は険しい顔をして黙り込んでしまつた。その状態はしばらく続き、一成が的外れな本を選んでしまつたのではないかと不安になつてきいた頃、少女が口を開いた。

「これ、あなたの好きなジャンルじやありませんよね」

少女は怒つたような、寂しいような顔をしてうつたえた。

「あなたがこんなジャンルの漫画を読むとは思えないです。私に気をつかつているんですか」

「それは違う。僕は、決まつたジャンルの漫画を読まないんだ。でも、それはつまり、どんなジャンルでも読むつて事なんだ。だから、もちろんその本も読むつてこと」

一成はひとしきり話し終えてから、ふつと息をついた。一成の読む漫画は、少年漫画、少女漫画にとどまらず、その範囲は教育漫画や、青年漫画、BL、GLにまで及ぶ。

「そうですか」

少女はわかつてか否か、小さく笑つて、早足で本をレジへと運んで行つた。そして、手早く会計を済ませ、足早に戻つてくる。一成はその様子を観察しながら、ふと思つた。「考えてみれば、さつきの言葉、遠まわしの告白だつたり……しないよね。ああ、変なことを考えるのはよそう。平静が保てなくなる」

小さく首を振り、余計な思考を振り払う。

「あれ、どうしたんですか。なんかキヨドつてますけど」

「だ、大丈夫。そんなことはないよ、さあ行こう」

### 三

少女は相当口が上手かつた。一成は成り行きで、少女の用事に付き合わされていた。一成が付き合わされている用事とは、

「なんで、イチゴ狩りなの」

まさに意表を突かれた、といつた具合である。

「いやあ、こういう所に一人で行くのって、なんか心細いじやないですか。あなたの分は奢りますから、ね」

一成の頭に、お礼のつもりなのではないか、という考えがよぎつたが、あえて言わないことにしておいた。

ちようどいい時期ということもあり、イチゴ狩りは大盛況だつた。その中を、一成は黙々とイチゴを口に運びながら、少女は幸せそうにイチゴを頬張りながら進んでゆく。

2 way

1st Way

「楽しそうだね」

イチゴを飲み込んだ一成は、沈黙に耐えられなくなり、口を開いた。

「ええ、そりやあもう。だつてイチゴですよ。イチゴが目の前にたくさんあるんです。楽しくないという選択肢はないですよ。それに、」

少女は少し間を置いて、イチゴに手を伸ばしていた一成ににんまりと笑いかけ、「そう言うあなただつて、十分楽しそうですよ」

と、嬉しそうに言つた。それからは、それぞれ思い思ひにイチゴを食べた。

2nd Way

「イチゴ、美味しいですねっ」

隣でイチゴを頬張つている少女が話しかけてきた。一成ははつきりと言葉には出さないが、行儀が悪い、と顔で語つた。

「あ、すみません」

少女が口の中のイチゴを飲み込む。そして、練乳の入った容器を手渡した。

「そのまま食べるだけじゃなくて、練乳をつけるとまた違った美味しさがありますよ」  
なるほど確かにそのようである。イチゴの酸味を練乳がマイルドにし、さらに味を  
引き立てている。気分はいちごミルクだ。一成はすっかり練乳付きイチゴの虜になり、  
少女とのイチゴ談義に花を咲かせた。

一成は軽く目眩を覚えた。

「そのままでいいんですけど、練乳付きもいかがですか」

隣から、少女が練乳付きイチゴを差し出してくる。

「ああそれ、美味しいんだよねえ」

一成はとつさに応えた。しかし、同時に一成は、自らの言葉に違和感を持った。

「待てよ。この情報はさつきこの子に教わったことだ。なのに、なんで僕は、ずっと前  
から知っている風に答えたんだろう。それに何故か、さつきの数分間の記憶がダブつて  
る気がする。どつちが本当なんだ」

様々な疑問が浮かんだが、きつと勘違いか何かだろう。そう考えて、一成はイチゴ  
を貪り食つた。もちろん、練乳付きで。

梅木早苗は目の前の男を全力で疑っていた。一見、ただの平凡な男子学生に見える。しかし彼は、昨日親友が消えた事件において、早苗が疑っている人物の一人なのだ。男は、こちらが疑つていてることに気づいているのか、先程からこちらの様子をうかがつてきている。昨日、早苗よりも後に校門を通過した生徒は、この男ともう一人、転校生らしき女子生徒のみ。そして、早苗の親友が消えたのは、学園から程近い、当時は人気の全くなかった通りで、隠れるような場所はなかつた。疑うのならば、この二人のうちのどちらかだろう。疑う理由としてはとても弱いかもしれない。それでも、少しでも疑う材料があるなら、とここん疑いたい。早苗は消えた親友に会いたい一心だつた。早苗は、突然立ち止まつた男の背中を睨みつけた。絶対に、親友を連れ去つた犯人の証拠を見つけようという決意を込めて。

「(恋人にでもなれば、聞き出しそういかも)」

## 五

三枝一成は自分の目を全力で疑っていた。とても信じ難い光景だ。頭上にはイチゴの葉が舞つてゐる。次々に周囲のイチゴが消失してゆき、消失しなかつたイチゴも、部分的に消失し、ツルや実が降つてくる。

一成は振り返つた。視界に入つたのは、立ちすくむ少女と、その上に倒れ込むイチゴの支柱。どうやら根元が無くなつたようだ。それと認識するよりも早く、一成は少女

の手を掴み、引き寄せていた。

「危ないでしよう。放心しないで」

軽い支柱とはいえ、下敷きになればかなり危険だ。飛び交う葉や蔓の中、一成と少女はなんとかいちご園を後にした。

一成は少女を家に送った後、足早に家に帰った。

「あれは一体なんだつたんだろう。でも、僕には関係ない。きっと明日は、いつも通りの一日になるさ。もう寝よう」

ベッドに潜り、一連の常識離れした出来事を忘れるように、固く目をとじた。